

転生軍艦は何をする？

しらぬり

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

前の世界で死んでしまった拓人は何故か艦これの世界でメンタルモデルになって転生する！

自分勝手に生きてゆくチートな人生を歩んでいく！

くこちらの事情で長期間ですが休憩をいただきます！

# 目次

転生軍艦、目を覚ます	1
転生軍艦、敵を蹴散らす	6
転生軍艦、浪漫を求める	10
転生軍艦、方針を決める	16
転生軍艦、陸へ上がる	23
転生軍艦、戦いへ介入する	27
転生軍艦、敵を殲滅する	35
転生軍艦、適応する	41
転生軍艦、脱出する。	45
転生軍艦、出会いを求める	52
転生軍艦、注目される	57
転生軍艦、空戦を行う	68

転生軍艦、面会する	75
転生軍艦、準備をする。	82
転生軍艦、見誤る	88
転生軍艦、敵を作る	92
転生軍艦、初の姫戦	99
転生軍艦、攻撃が防がれる	108
転生軍艦、とどめを刺す。	113
転生軍艦、職に就く	120
転生軍艦、質疑応答	127



# 転生軍艦、目を覚ます

目を覚ますといつもの白い清潔感のある天井とは違い鉄の天井が目に入った。

「……どこ此処」

とりあえず起きるか。少し固いベットから起きた俺はすぐ近くにあった手紙を見つける。

「手紙？」

宛名は誰だろうと裏返すと——拓人様へと書かれていた。

『拓人』これは俺の名前だ。俺宛だと分かったので遠慮なく中身を見ることにした。

ぺりつとシールを？がして中の紙を取り出し読み上げる。ちなみに読み上げるのは気分だ。

「ええ〜どれどれ……『貴方は前世で死にました……』」

初めの一文でいきなり訳が分からないことが書いてある。

「……信じられないかもしれませんがこれは真実です。ここから書かれることは貴方の今後の運命に影響します。心して読んでください。』」

……マジかよ。死んだかどうかはまずは置いておく。この後に書かれていることが

もしも本当に俺の人生に影響をもたらすのならば、これは一文字も見逃すことはできない。  
い。

「：『貴方を神の気まぐれで艦隊これくしょんの世界に転生させました。理由は暇  
だったからです。』」

こいつふざけてんのか：？もしも本当ならば喜んで自分の死を受け止め、  
そしてこいつをを許そう。うん。

『転生の特典として貴方が自由にカスタマイズできる軍艦を与えました。詳しくは指  
令室に設置されているデバイスをお使い下さい。』」

その後、手紙にはここは実は艦娘が単体で出るのではなく、メンタルモデル方式らし  
い。

他にも現在の世界情勢深海棲艦について、現在の開放海域について等：：

「成程：。何と無くわかってきたぞ。」

とにかくまとめ一言で表すなら。

「これが事実なら最高！」

というわけで俺は早速指令室に向かった。え、どうして道を知ってるかって？

なんか知らんが体が覚えてるんじゃない。

指令室に着くと高さが腰ほどの位置でパソコンのような四角い画面をしたデバイス

があったら。

画面には『名前を入力してください』という文字が書かれている。

俺はそこに前世でゲームによく使っていた『味方』という意味で《アライ》と名乗ることにした。

すると、画面の文字が消え『Welcome home Aily』と書かれた。

お帰りなさいとなぜ言われているかはわからないが取り敢えずこれで使えるようになっただろう。

デバイスには『全長』『全幅』『主砲』『副砲』『魚雷』『ミサイル』『超兵器』『機関部』『その他』と書かれている。

なんだよ超兵器って。ミサイルもあるし。しかも船のでかさも変えられるのかよ。手紙の奴中々いいものくれたなーって思ってたけど…

《これただのチートじゃん》

最高じゃねーか。絶対こいつ解ってるよこういう世界はチートを使って暴れまくるのが最高ってよ。

取り敢えずまずは兵装をいろいろいじくるか。

兵装

主砲：48cm4連装レールガン3基

副砲：20センチ3連装レールガン6基

魚雷：通常弾頭魚雷 黒渦弾頭魚雷

対空兵装：対空光線ガトリング砲126門 対艦兼対空ミサイル『エグゾセ改』

超兵器：量子波動砲

機関部：量子機関P型二基

全長：2018.99m

幅：56.3m

最大速度：およそ100knot

装甲：正直言って砲弾一切効かないYO☆

チートすぎる。いやいやいや、確かにチートぐらいの力があつた方が楽しいって言うたけど…

こんなに強すぎるのとかどう考えても国が関与してまいりますやん。  
でもそれがいい（ドM感）



「：  
コチラシヨウカイタイ。ナゾノキヨダイセンカンヲカクニンシタ。」

## 転生軍艦、敵を蹴散らす

さてと、こちらに来てから実に一週間がたった。

今の状況は——正直ヤバイ。

最近、黒い船がこちら辺に集結しつつある。まあ深海棲艦だろうね。

そして集結しつつある理由はたぶん俺だろう。

実はここにいる間に一度だけ深海棲艦に接触した。その時はしつぽ巻いて逃げたがな！

そして手ごころな島の砂浜に埋もれています。

は？とか言わないでください。だって仕方ないじゃないですか。

いきなり戦い方知らないのに戦いになるとか知らないっすよ。

しかし、隠れた方がいいが完全に場所がばれているので日に日に深海棲艦が集まってきた。

そして俺は気付いた。深海棲艦が結集し終えたことに。

理由は簡単。超高性能なレーザー使ってるから遠くてもすぐわかる。

前回はしつぽ巻いて逃げたが、この一週間のうちに俺だって砲塔を回したりする練習

をしたりしている。

レーダーを見ると赤い点は優に200を超えていた。

だが忘れてもらつては困る。何故ならつ俺はチートの権化だからだ！

「はっはっはっはっは！」

“まだ” 誰もいない海に悲しく声が響き渡る。

「……はあ。」

深海戦艦が目視できる範囲に近付いていく。それと同時に敵からの砲弾があたりに着弾する。

「おわつとと。」

島に埋もれているためあたりはしがないが、島に数多くの弾丸が着弾し船体も揺れる。

「島から脱出し、敵性勢力を殲滅する！機関始動！最大船速で脱出する！」

ゴゴゴゴゴと地響きを立てながら船体が浮く。

「よし！全主砲照準合わせ！」

重々しい音を立てながらその音とは似合わない速度で主砲が回転する。

「撃ち方はじめっ！」

俺が一声かけると。チャージをする音やビーンという発射音が響く。

レールガンといえど連射力は0.5発／毎秒である。

そして演算装置のおかげで全く狂いがなく敵に弾が吸い込まれていく。

そして着弾と同時に巨大な水柱を立ててしずんでゆく。

「ヒヤッハー!!汚物は撃沈だあ!」

俺は完全にトリガーハッピー状態だった。

— ほぼ同時刻

↳横須賀鎮守府↳

この鎮守府はいつも通りの平和な鎮守府——ではなく第一艦隊を連れた提督が  
「イージス艦、みらい」に乗り、深海棲艦が集結しつつある近海海域に向かった。

「何で近海海域に集結しているんだ?もしかしたら鎮守府を強襲する可能性も。」

提督が可能性を考えていると指令室へ一人の「艦娘」が入ってきた。

「提督!深海棲艦に動きがありました!モニターに表示します!」

モニターの電源が付き、そこには島を砲撃する深海棲艦が映っていた。

しかし、次の瞬間、目を疑う光景が飛び込んできた。

「なに……これ……？」

そこには島から砂埃を立てて出現する異常な大きさの船体が見えた。

そしてその船は深海棲艦へ砲撃する。しかしその威力は異常だった。

「?…?…」

倒すのに只でさえ苦勞する鬼クラスやフラグシップ級を一撃で沈めてゆく。

それは戦いではなく、虐殺と化していた。

「鎮守府に伝えて……『我、所属不明艦を発見せり。』……これより所属不明艦と接触する。」

これは見過ごすことはできない。あれは何かを必ず確認しなければ……

## 転生軍艦、浪漫を求めろ

戦いが終わり椅子に腰を掛ける。そして溜息を吐く。

何で溜息を吐いてんだって？それは簡単さ……

圧倒的 ロマン 不足 だよ！

やっぱなんかレールガンじゃ味気なさすぎる！硝煙の匂いとか、発射時の爆音とか欲しい！

というわけで早速武装を変えて行こう。

なに？速いって？そんなの知らんがな。それよりも今はロマンだ圧倒的にロマンが足りんのじゃあああああ！

変更後――

兵装

主砲：48cm4連装陽子砲3基

副砲：20センチ3連装陽子砲6基

魚雷：通常弾頭魚雷 黒渦弾頭魚雷

対空兵装：対空光線ガトリング砲126門 対艦兼対空ミサイル『エグゾセ改』

超兵器：量子波動砲

機関部：量子機関P型二基

全長：2018.99m

幅：56.3m

最大速力：およそ140knot

装甲：一応戦艦の徹甲弾は貫通できるYO☆

特殊兵装：電磁障壁・特殊カタパルト・橘花15機・零式艦上戦闘機15機・特殊潜航装置・大型演算装置

やりました。

今回は特殊兵装があつたのでつけてみた。後は装甲を少し薄くしてエンジン強化して速力あげたぐらいかな…

その時レーダーから警報が鳴った。

レーダーをのぞき込むと七隻編成の艦隊がこちらに接近していた。

先頭から…

イージス艦一隻・長門型二隻・翔鶴型二隻・最上型二隻

って感じかな… ていうかさつきからのそこら辺をハエのごとく飛んでいる烈風を打ち落としてえ…

まあそれは置いといて先ずはどうするか。

交戦の意思はないだろうけど… 先ずは砲塔だけでも向けといて牽制しとくか。



## ——イージス艦内

この時は考えてなかった。相手は撃つてきた深海棲艦を蹴散らしただけ。もしも深海棲艦と同じと認識されていたら攻撃される。

「提督！不明艦がこちらに第一砲塔を向けています！」  
「!?!」

この時は知った。深海棲艦とは対立はしているが”人間と対立していない”とは限らないと。

「何か… 何か交戦の意はないと知らせれるものは…。」

その時一つの方法を思いついた。

「白旗……！」

すぐに自分の着ている軍服を脱ぎ近くにある窓から掲げる。

「お願い……分かって！」

「ん？」

どう対処しようかと考えていたところイージス艦の窓から白い何かがたなびいていることが分かった。

「もしかして……」 白旗「？」

だとしたら関わりあう関係もないか。さっさとこの海域から離脱しよーっと。

「それじゃあ急速潜航〜！」

俺はひとまず海の中に潜って現海域を離れることにした。なぜかって？だってブラックな提督とか鎮守府とかに行きたかないもん！どう考えてもめんどくさいことに巻き込まれるじゃん！

## 転生軍艦、方針を決める

く イージス艦内く

窓から軍服を掲げて数秒後巨大戦艦と思われる艦はあり得ない速度で潜り始めた。

「嘘でしょ…。」

巨大な物体が水に沈み、その余波で波がくる。しかし、私は目の前で起こったことをいまだ信じれないでいた。

「再び武装などを振り替えろーの会！」

ちなみに会員は俺一人だけです。畜生！そんなことは置いておいて、まずは色々となおしてみて思ったことがある。

「ちよつとデカすぎない…？」

日本の大和でも大体250mぐらいだったのに俺は2000m越えとか単なるバケモノじゃん。取り敢えず最終手段以外は大きさを押さえておきますか…。

く色々整え中く

兵装

主砲：48cm4連装陽子砲3基

副砲：15.5cm3連装陽子砲2基6門  
12.7cm連装陽子砲12基24門

魚雷：通常弾頭魚雷・黒渦弾頭魚雷

対空兵装：25mm3連装陽子機銃52基・対艦兼対空ミサイル『エグゾセ改』VL  
S(64+32セル)

超兵器：量子波動砲

機関部：量子機関P型二基

全長：273.0 m

幅：38.9 m

最大速力：200 knot 以上

装甲：一応戦艦の徹甲弾は貫通できるYO☆

特殊兵装：電磁障壁・特殊カタパルト・橘花3機・特殊潜航装置・大型演算装置

大型演算装置を使って衛星をハッキングして大和にできるだけ近づけてみたよ☆  
「まあ…潜水できる戦艦なんて聞いたことないけどな。」

取り敢えず気分で霧発生装置とかついでに乗せておくか。何でって？気分さ（ー、  
（ー）キリッ

「何もない……」

「取り敢えずあてもなく進んでみますか」



日本の沿岸に沿って潜航していたため敵に会うどころか艦娘にすら会えない。はあ… 陸に行けば大本営に連れていかれるだろうし… ん？

「もしも武装を全部仕舞って漁船と同じ大きさにしたらばれないんじゃないやね？」

思い立ったが期日！早速デバイスを操作して大きさを変える。ちなみによくゲームで服装などをへセーブしていつでも選択できるような機能があるじゃろ？それも搭載されていたんじゃない。正直メツサ便利。いいね！

しかし、デバイスをいじっているときにふとあることを思い出した。

「あ… 服装どうしようか。」

今の俺の服装は袴なんだが結構気に入っている。だが流石にこの格好で行ったら怪しまれるよなあ…。

あえてこの格好で出ていって印象付けるのもあり？

「いや… 流石に… だが…。」

目立ちたい！ずっとポツチだったからだれかに注目されたい！あああああああ！

結局袴のまま行くことにした。後悔はしていない。

## 転生軍艦、陸へ上がる

「流石に暗いな……。」

夜になり始めたところを岸に船をつける。深海棲艦の攻撃で内陸部と東京以外の都市は攻撃されている。そのおかげで、誰にもバレることなく上陸することが出来た。船は見つからないように潜水してもらおう。

「取り敢えずジャケットだけ羽織ったし多少は大丈夫だろう。」

なら袴から着替えろって?…… 気にするな! (無茶) 黒いジャケットなら多少は見られても大丈夫。顔は隠せてないから意味ないって?…… あんたあだあつとれえ!

「取り敢えず……ここら辺は横須賀鎮守府が近いか? まあ偵察がてら近付いてみますか。」

見つかりませんように……。

しばらく歩くと目の前に赤いレンガ造りの建物が見えてくる。その向こう側には家などが建っている。

「あれが”横須賀鎮守府”か。」

門に近付いて中を覗こうと試みるが、門番がいてそれは敵わなかった。何故か門番は女性だったが。しかし、今更だが最初に接触したイージス艦は何処所属だったんだ？ 所属だけでも確認すればよかったかなあ。

「まあいいか。何処にするか見極めた後に考えればいいか。」

俺は鎮守府の周りをまわり、持ってきていた集音マイクを使って中の様子を調べる。この集音マイクは特殊兵装の『特殊兵器庫』の中にあつたものを持つてきた。ちなみに見た目は普通の集音マイクだが、中身は未知の技術が詰まっているらしい。未知の技術って便利。

「さてと、どれどれ……。」

最初に聞こえてきたのは喧噪と金属のようなものがぶつかる音、何かが焼ける音、まるで揚げ物を作っているような音……。いかんいかん腹が減ってきてしまった。

「食堂かな？」

この音を聞くだけだとかなり幸せそうだ。だが、根が腐っている場合もある。きちんと調べないと。……おそらく大丈夫だが。

次に聞こえてきたのは話し声だった。その内容は出撃の戦果をほうこくしていることが分かった。特に罵倒されることもなく最後に感謝の言葉が“女声”で聞こえてきた。

「女性……？」

女性って軍人になれたっけ？まあそれはどうでもいいとして横須賀鎮守府ならよさそう。ほかの鎮守府知らないけど。他の鎮守府の人ごめんね☆

「さてと、さっさと横須賀鎮守府から出ますか。」

俺は横須賀鎮守府の横にあった民間人が使える港から船に再び乗り潜水していった。漁船でどういう風に潜水するんだよとか言わない。未知の技術だよ。

「……ジー」

それを”録画していたカメラ”があつたとは気付かずに。

## 転生軍艦、戦いへ介入する

「提督、これを。」

眼鏡をかけた黒髪の女性が軍服を着た女性にタブレット端末を渡す。そのタブレット端末には袴の上に黒いジャケットという摩訶不思議な格好をした男性が海中から現れた漁船に乗り込み海中に再び消える映像だった。

「…これは？」

「昨夜隣の港の防犯カメラに捉えられていた映像です。念の為住民データとこの映像の顔を照合しましたが一致する人物はいませんでした。」

「ということは新型の深海棲艦か第三勢力か…。」

「分かりませんが一応覚えておいてください。」

「ああ、分かった。」

「ところで提督、今日出撃した第一艦隊のことですが…。」

「どうした？」

「その出撃した海域では新型の深海棲艦が出現しているという噂が。」

「そうか…。まああいつらなら危ないと感じたら帰ってくるはずさ。」

「そう……ならいいんですが。」

「しかしこの海域の深海棲艦は弱つちいわねえ。」



「こら曙、慢心しちやダメよ。赤城さんだっていつも言ってるじゃない。」

「そうよ曙。雷の言う通りよ。」

「ぐっ……」

曙と言われた人物は他の二人から注意されている。残りの三人はその光景を見ながら微笑んでいる。

「やっぱり暁ちゃんたちの会話は微笑ましいですね。」

「でも本当ですね榛名さん。ここら辺ならもう少し強いのが出て来ても可笑しくはありませんけどね。」

「……確かにそうですね。翔鶴さん、瑞鶴さん気を付けてくださいいね。」

「分かったわ。でも気を付けるのは榛名さんもよ。」

そう言っている時だった。

「前方から敵機接近！」

「迎撃準備！」

「了解！」

俺はいつも通りに海を潜航していた時のことだった。

「ん?」

レーダー上にいくつかの反応が表示された。

「深海棲艦と思わしき艦影6隻と艦娘と思わしき艦影も6隻。…一応見てみますかね。」

ちようど暇だったし危なくなったら参戦すればいい。

「ふうーん?」

開幕は制空権が深海棲艦側に渡った。

「制空権を失ったか…。よく知らないが結構ヤバいんじゃないか?」

俺は艦これをあまりプレイしていないためよくわからないが航空支援は大切と誰かが言っていた気が……。

「念の為『大和』さん装備で行きますか。」

海中で漁船から大和を模した戦艦に変形する。ついでに切り発生装置も作動させますか。これ霧が濃くなるまで少しだけ時間がかかるからな。

取り敢えず映像が表示できる位置まで浮上しようかな〜と。

迂闊だった。戦っている途中で弾薬がほぼないことに気が付いた。まさか”これを狙っていたなんて…。さらに霧も出てきたことで艦載機が発艦できなくなっていた。

「全員撤退！私が囷をするから全員…！」

しかし言い終わる前に悲劇が起こった。

『こちら曙…被弾したわ。艦装は大丈夫だけど機関部がやられたわ…。囷にするなら私を使って。』

「そんな事できません！ならせめて私が囷になっている間に…。」

『そんな事していたら全員を危険にさらすことになる！だから置いて行って！』

「そんな…！」

私は曙ちゃんを説得することに頭がいっぱいですっかり失念してしまっていた。奴らにとつてこの中で一番「邪魔な艦」はどれかが。

映像が見られる深度まで浮上。幸い戦闘中なため多少の揺れは感知できないだろう。……多分。

「おっ映像が映…!？」

映像が映った時思わず絶句した。駆逐艦が一隻集中攻撃を受けていた。それも機関部を。動けなくなればただ的。更にその後は戦艦を集中狙いでほぼ中破状態になっている。

「クソツ、浮上！」

異常な速度で俺の船体は海上に浮上していく。

「電磁障壁作動準備！」

そして海面に浮上した。

「電磁障壁作動！全砲塔九一式徹甲弾装填！装填終了次第発射！」

まずは周りの奴らを殲滅する。後のことは後で考えるか。

## 転生軍艦、敵を殲滅する

主砲から放たれた砲弾は一寸違わずに敵へ吸い込まれていく。流石演算装置だ。レールガンのソニックムーブだけで敵を沈めていた俺とは大違いだ。

「残りは……一隻か。次弾装填！」

しかし、次の瞬間その一隻から艦載機が発進していく。その数はざっと30機。未知の技術とはいえ流石に砲弾を詰めるのには約40秒かかった。その間に次々と艦載機が発進していった。

「多いな……だが俺の前では関係ない！対空戦闘用意！」

艦載機は高く飛ぶんだり水面スレスレを飛んだりと様々な方法で接近してきている。

「なるほど……個々で考えながら攻撃するわけか。しかし、ビームの射程を甘く見るんじゃない！」

およそ500mを切ったところで俺の対空砲が（ビームだが）火を噴く。突然のことに艦載機は対応できずに次々と落されていった。

「チエックメイトだ。撃てえ！」

爆音とともに吐き出された砲弾は残った一隻の敵性勢力を海に沈めた。

「終わったな．．．」

そして俺は思い出した。後ろに六隻いることを。

「霧発生装置停止。」

霧の発生装置を停止させる。俺はそのまま彼女たちに近付いていく。



私は自分の目を疑った。霧が発生してきて急に海面が揺れたと思ったら海中から出てきたのは思いがけないものだった。

「大和……さん？」

海中から出てきた大和？に向かつていった砲弾はすべて手前で破裂していった。そしてお返しと言わんばかりに大和？の主砲は敵を倒していった。しかし、そこに目を覆いたくなる光景が飛び込んでくる。

「嘘……まだ艦載機が……」

霧が発生しているため艦戦を飛ばすこともできない。この数で攻められたらさすがの大和でも無事では済まないだろう。

「発光信号で伝えなきゃ……！」

伝えようとした次の瞬間突然大和から棒状の光が艦載機に向かつて飛んでいき撃ち抜いた。

そのまま大和は残った敵艦を沈めこちらに接近してきた。そして大和から送られてきた発光信号は、

『ワレヤマト キカンラノエンゴヲオコナウ。』

一応無線ではなく発光信号で向こうにこちらの意思を送ったが伝わったかな？

そう考えていたところに向こうの旗艦と思われる艦から

『ジュリシタ タダアケボノノキュウジヨオヨビエイコウヲユウセンスル』

と帰ってきたので、

『リョウカイシタ』

とだけ返しておいた。しかし、今考えたらこの艦娘たちは何処の鎮守府に所属しているのか気になってきたが、いちいち発光信号で連絡を取るのはめんどいのでやめた。し

ばらくしたら旗艦から『スベテノサギヨウガオワツタ エンゴヲモトム』と来たので『リヨウカイシタ』と返しておいた。

「しかし、何故かここら辺は敵が少ないな……」

特にその後も問題は起こらずに沿岸周辺まで来れた。地図をみるとここら辺は『横須賀』らしい。

「まあ特に問題ないとは思いますが……まだ時期じゃないかなあ……」

特にもう少し色々と探索してみたいし。なので脱出計画を立ち上げてみた。

内容は、エンジントラブル（嘘）↓霧発生装置起動↓回りが見えなくなるぐらい出力

をあげる↓潜水する↓俺だけ消える

と言うプランだ！素晴らしいだろう？ついでにもう少し恩を売っておけば接触した際にいろいろと楽だろうしな。

## 転生軍艦、適応する

ハイイ。どもどもアライです。実は今私の目の前に二等身の何かが目の前をふわと浮いているんだが……。

「初めまして。私は副艦長の副長妖精です。」

「……妖精？」

「はい。」

「……いつから居たの？」

「私達は先ほどまでこの世界に適応するためにいなかったんです。」

……  
「……んんん？つまり、さつきまで居なかったけどそれはこの世界に適応するためであつて本来ならいるのか？まあ確かに艦これには妖精がいるけどさ。」

「それと、先程までは艦長が自分の意志で艦を動かしていました。これからは私達に連絡を入れないと動けないのでよろしくお願いしますね。」

……  
「何となく分かった。しかも私達ということは他にもまだ居るのね。」

「取り敢えず言いたいことは分かった。それじゃあ俺が考えていた作戦も言っておいた方がいいな。」

「作戦……ですか？」

「ああ、まだ世界を見て回りたいからな。今護衛をしている奴らを安全な場所の近くまで届けてから一度逃げる。」

「なるほど……分かりました。ん？ちよつと待つてください。」

副長妖精はモニターをじつと見る。少しした後はこちらを見る。

「ソナーに反応あり。数は5です。」

「距離は？」

「およそ……14500。どうしますか？」

「泳がせろ。そいつらを利用する。他の艦のソナーも妨害しておいてくれ」

「了解しました。」

俺は発光信号の準備をする。そしてこの後の作戦のために副長妖精にいろいろと準備してもらわないとな。

私は突然出現した大和を観察していた。外見は確かに大和そのものだが中身はまるで違う。百発百中の主砲、そして対空火器から放たれた『光る棒』。

「あれはいつたい…。」

私知知っている大和ではない。しかし、私たちを助けてくれたのは确实。でもなぜ…。

そう考えていた時でした。

ドオオオオン!!

「!?」

突如爆音が鳴り響く。音がする方を向くと。

「……大和。」

大和が炎上していた。それと同時に後方にいた雷から発光信号が送られる。

『ソナーニハンノウアリ。カズハゴ。』

「潜水艦……。」

大和はいまだ炎上している。しかし、大和は旋回行動をしない。そして、大和から発光信号が送られてきた。

『ワレヒガイケイビ。ワガカンヲオトリニシテキカンヲハタイヒセヨ。』

私達はすぐに援護しようとしたが現状を見てハツとした。大破の曙ちゃんに中破の私。ここはどうした方がいいかは私でもわかる。

「発光信号を、『ゲンカイイキヨリダツスル。』」

私は仲間を守るために逃げることを選んだ。

「……どうか、ご無事で。」



## 転生軍艦、脱出する。

爆音が響く中俺は海面に向かって副砲を撃ちまくる。

「副長、被害は？」

「0%です。電磁障壁も数日は稼働可能です。」

数日間稼働させるほど戦うんだったら即刻逃げるね。まあそれよりも榛名さんたちが少し離れるのを確認する。…そろそろいいかな。

「副長、爆発を頼む。」

「了解。第二砲塔上部の爆薬を起爆します。」

ドゴオオオオオオン！

「うおつと… やっぱり揺れるなあ。」

「電磁障壁を起動しているので一切損害はありません。煙幕発生装置も起動します。」

「ん、頼んだ。」

向こうからはどの様に映っているのかは分からないが、これで少しでも急いでくれれば良いんだが。

「艦長、潜水艦1隻が先ほどの艦隊に向かっていきます。」

「攻撃できるか？」

「はい。船首に魚雷発射管を生成、そこから音速魚雷を当てます。」

「ならそれで頼む。」

「了解。」

船首が一瞬輝き魚雷発射管が生成される。そしてそこから音速魚雷が発射される。それは潜水艦に吸い込まれるように（音速で）進んでいき、そのまま潜水艦の機関を貫き停止する。

「音速魚雷、敵機関部を破壊。敵潜水艦航行不能です。」

「よくやった。次は左舷につけた爆発も頼む。その後は左舷からタンクに注水。左に船体を傾かせろ。」

「了解。爆発、左舷注水。」

ドオオオオン！

「：： やっぱり被害とか出てない？」

「被害は0%です。心配しすぎです。」

前世では爆音とか一切聞いてなかったからな。間近で爆音が何回かなるとやっぱり心配になる。

「おっ：： 傾くの結構早いな。そろそろ右舷からも注水。これ以上傾かないように。」

「了解しました。右舷注水。」

因みにこのやり取りをしてきている間にも敵は魚雷撃つて来てんだよね。ずっと爆音と衝撃が来るんだよ。

「そう言えば榛名さんはどれくらい離れた？」

「目視で見える範囲外です。」

「よし、主砲斉射辞め。副砲を陽子砲に切り替えて敵潜水艦へ斉射。」

「了解。副砲、陽子砲へ切り替え。エネルギー伝達100%。斉射！」

軽い音を奏でながら側面から光の棒が放たれる。光の棒は潜水艦の機関部を撃ち抜き無力化していく。

「無力化しました。」

「そうか……。それじゃあ早速船体をいじくりましますか。」

48 転生軍艦、脱出する。

く  
武  
装  
く

主砲：62口径5インチ単装陽子砲一基

対空兵器：C I W S (M k. 15 mod. 25) 二基  
M k. 41 V L S (64  
+ 32セル)

機関部：量子機関P型一基

全長：170 m

幅：21m

最大速力：100knot以上

装甲：一応戦艦の徹甲弾は貫通できるYO☆

特殊兵装：電磁障壁・特殊潜航装置・大型演算装置・霧発生装置

「突然イージス艦に変えてどうしたんですか？」

「気分。ここで待ってたらもしかしたら救援部隊が来るかもしれないし、敵の増援が来るかもしれないし。どっちにしろ楽しそうだからね。」

「はあ…分かりました。」

「何もないと寂しいからね。早く何か起こらないかなあ。」

## 転生軍艦、出会いを求める

「榛名さんたちと別れてから二日後」

「暇だ……。」

「すぐに来るわけありません。」

まあそれは分かっていたけどさ。でも家で色々とか何かやってた人間にとって暇なんだよ……。艦娘はおろか深海棲艦すら居ないんだもん。結構陸に近いところにいるつもりなんだけどなあ……。

「はあ……。誰か来ないかなあ……。」

「どうやら誰か来たみたいですよ。」

「マジで!?!」

「と言つても漁船ですが。」

「あつそう……。」

「露骨に落ち込みますね。」

そりゃ軍関係者が来たと思つたら漁船だもん。落ち込みたくなるよ。襲われてるなら助けるけど。



「で、その他には？」

「そうですね…。不明艦が一隻ぐらいです。」

「方角は？」

「漁船と同じ方向です。」

「へ…は？」

「ですから漁船と同じ方向です。」

マジかよ。まさか同じ方向にいるとはね。しかし、一隻だけとか何考えてるんだろうか。

「不明艦は深海棲艦か？」

「付近の衛星をハッキングし分析しました。不明艦は深海棲艦と断定できます。」

「不明艦と漁船との接触時間は？」

「およそ30分です。」

「漁船と我々の接触時間は？」

「50knottで20分です。」

「不明艦に※GBU—28みたいなものは使えるか？」※地中貫通爆弾「バンカーショット」

「GBU—28自体をミサイルに搭載させることは可能ですが、過貫通しますよ。」

まあGBUー28を軍艦にぶち込んだらそうなるよね。しょうがないか。

「じゃあそのまま普通の対艦ミサイルぶち込んで。8発。」

「了解。座標入力完了。ハッチオープン。Fire!」

ハッチから放たれた八つの槍は目標物を破壊するために空へ飛び立つて行った。

俺達はいつも通りに漁をしていた。深海棲艦とかいうのが出て来たらしいが、関係ない。いつもは艦娘とかいうのが海を守ってくれている。最近、奴らが近くまで攻めてきているから漁を禁止することを言われていたが関係ない。漁をしなければ家族を養っていけない。政府は漁は禁止するが、金は渡してこない。ただでさえカツカツなのに。俺たちに飢えて死ねと言っているようなもんだ。

「ふう……結構とれたな。おい、どうするー！」

「仕掛けだけしかけよう！」

俺達は次の漁のための準備をしようとした時だった。

「まずいぞ！深海棲艦だ！」

「なんだって！」

沖の方から一隻の船が見える。しかし、大きさは俺たちが乗っている漁船より遥かに大きい。前の巨大な主砲は此方を向いている。そして、その主砲が仰角を修正した瞬間。

突然頭上を「何か」が通り過ぎる。

その「何か」は深海棲艦に突き刺さると突如爆発する。

「なんだぁありや……。」

「今はここから離れるぞ！」

俺は仲間の声で我に返る。その後はすぐに漁港に戻った。

「ありやなんなんだ……？」

「お前まだあの飛んできた何かを考えているのか？」

「しようがねえだろ。気になるんだからよ。」

「何が気になるんですか？」

声の方向を見ると鎮守府の女提督がいた。なぜここにいるんだろうか。まさか漁に出ていることがばれたんじゃ……。

「話せば漁のことは黙っていることもできますが。」

「……分かりました。」

どうやらバレていた様だ……。その後俺たちは起こったことを洗いざらい話して、お咎めなしとなった。

## 転生軍艦、注目される

「ふう……何とかなったな。」

「ええ。正直冷や汗をかきそうでしたよ。」

「……妖精って汗かくの？」

「分かりやすいように比喻しただけです。」

「さいですか。」

漁船を助けた後にすぐ近くの鎮守府が動き出したので接触しようと思ったのだが、『そう言えばイージス艦で接触したら不明艦として攻撃されるんじゃないかね？』

と思ったのでまたまた海に潜りました。こらそこ、チキンとか言わない。俺はチキンじゃなくて慎重なだけだ。

「取り敢えずイージス艦から変えますか。」

「次は何にするんですか？」

「そうだね……空母とか？」

「……どうやって接触するんですか。」

「俺が艦載機に乗って向こうの空母にGO！最高じゃね？」

「却下です。万が一撃ち落されたらどうするんですか。」

「頑丈にさえすれば大丈夫だろ。」

「そもそも操縦できるんですか？」

「……。」

「目をそらさないください。」

結局空母にはなつたが艦載機での接触は禁止になつた。ちくせう。

「取り敢えずイージス艦から変えますか。」

く武装く

艦載機：艦上戦闘機「烈風」18機＋補用2機、艦上攻撃機「流星」18機＋補用2機

高速偵察機「彩雲」6機＋補用1機（全て強化済み。）

烈風：九九式20mm二号陽子機銃4挺・九九式六番通常爆弾一型或いは九九式六番二号爆弾

流星：20mm陽子機銃2挺・13mm旋回陽子機銃1挺

二式八〇番五号爆弾一発或いは九九式二五番通常爆弾二発

彩雲：一式旋回陽子機銃1艇（焼夷弾使用可）

対空兵器：1 2. 7 c m 連装高角陽子砲 8 基 1 6 門、  
2 5 m m 3 連装陽子機銃 3 7  
基

1 2 c m 2 8 連装誘導噴進砲 1 2 基

機関部：量子機関 P 型 二基



幅  
:  
3  
8  
.  
9  
m

全長  
:  
2  
6  
6  
m

最大速度：50 knot

装甲：一応戦艦の徹甲弾は貫通できるYO☆

特殊兵装：電磁障壁・特殊潜航装置・大型演算装置・霧発生装置

「こんな感じだな。」

「空母にしては大きいですね。」

「そりゃモデルは元大和型戦艦の空母だからな。」

そろそろ俺もどこかにお世話になろうかね。



く大本營く

「それでは会議を始める。早速だが、最近横須賀鎮守府付近で目撃されている不明艦のことだが。」

「それは深海棲艦ではないんですか？」

「……そう言えばここにいるほとんどの者はどんな船か知らないんだったな。それでは、この映像を見て欲しい。」

そういうとスクリーンにある映像が映し出される。そこに映ったのは右に戦艦長門、左に戦艦陸奥。そして中央にとつともなく巨大な軍艦が映っている。

「これが不明艦との初の接触だ。」

そして不明艦はこちらに主砲を向ける。すぐに撮影者がカメラを置き窓から脱いだ軍服をたなびかせる。すると不明艦は突然信じられない速度で沈んでいく。そしてその余波でカメラは下に落ち映像が切れる。映像なのに巨大な主砲を向けられた時の緊張感はず屋にも伝わった。

「次は映像はないが、証言者に来てもらっている。入ってくれ。」

部屋の前が開くと、榛名が入ってくる。

「彼女が二回目にも不明艦に接触した子だ。それでは頼む。」

「はい。先ず私はその日は海域解放のために海域へ向かっていました。しかし、その道

中で運悪く敵主力と思われる艦隊に遭遇しました。そして、私たちが沈みそうになっている時に突然霧が発生しました。そして、「

ここでいったん榛名は言葉を区切る。

「海中から戦艦大和が出現したんです。しかし、中身は全く別物でした。前から話を聞いていた不明艦だと気づいたのは帰還してからでした。」

「それで、大和はその後どうなったんだね？」

榛名は少し俯き答える。

「……鎮守府付近の海域の潜水艦によって構成された主力部隊らしき艦隊によって轟沈しました。」

「……と言ふことだ。」

この話に一人の男が手を挙げる。

「しかし、轟沈したならば今その大和は関係ないのでは？」

「いや、実はその轟沈した海域の付近に漁船が近づいたときに深海棲艦に遭遇したそうなんだが、突然筒のような何かによって轟沈したらしい。」

「それは噴進弾ではないのですか？」

「噴進弾にしては報告に上がったものと長さが一致しない。更にその噴進弾らしき物は一度上昇したのちに深海棲艦に突っ込んだようだ。」

「ここまで聞いた男は何かに気がついた顔をする。

「上昇……それって！」

「気づいたようだな。恐らくだが、まだもう一隻不明艦がいるようだ。しかも『ミサイル』を搭載したな。」

「……どうされますか？」

「当然だが、接触を図る。今ある衛星を使い横須賀周辺の海域の調査をしろ！」

「了解！」

転生軍艦と大本営の接触する未来はそう遠くない。

## 転生軍艦、空戦を行う

「そう言えば大本営に動きつてあつた？」

「少々お待ちください…。どうやら我々の存在に気付き接触しようとしています。」

「了解。大本営所属の艦隊が来たら逃げるよ。最初は横須賀鎮守府にしたいからね。」

「大本営所属の艦隊を敵性戦力に設定。」

「それはしなくていいから。近付いてきたら潜つて逃げるだけだから。」

「…了解。」

取り敢えずあの後は海面に浮上して沖の方に逃げた。恐らく騒ぎを聞きつけて船が来るだろうし…。…とか俺が行くところ何か必ず起こっているような気がする。まあどうでもいいが。

「副長、ここから一番近い艦隊は？」

「少々お待ちください…。WEST方向距離40kmに艦隊を発見。交戦中のようです。」

「じゃあ早速、第一次攻撃隊発艦始め！」

プロペラの音を鳴らしながら何機もの艦載機が発艦していく。



「第二次攻撃隊発艦準備！副長、制空権はどちらが上か分かるか？」

「… 深海棲艦側が制空権を奪取しています。」

「分かった。」

俺は艦橋にある無線機を使い発艦した攻撃隊と連絡を取る。

「第一次攻撃隊に告ぐ、全武装及びブースターの使用を許可する。何としてでも艦隊を守れ。」

『了解！』

「俺たちも向かおう。副長、最大船速で向かってくれ。」

「了解しました。最大船速、対空警戒。」

俺は近くにいた艦隊を助け人類と艦娘たちにお世話になるために動き出す。

「そう言えばその艦隊はどんな構成なの？」

「… 赤城と加賀、暁型に天龍型、高雄型と金剛型ですね。」



私たち横須賀第一艦隊は危機に陥っていた。不明艦の捜索をしていたところ接敵、主力艦隊ではなかったが、援軍を呼ばれたのか遠方から敵主力艦隊から来たと思われる艦載機が私たちを襲っていた。2対1で数に物を言わせ敵は攻めてくる。こちらも応戦するがその抵抗もむなしく次々に落とされていく。

「……もう駄目なのかしら。」

「榛名、あきらめんなよ！ここで諦めたら二度と仲間と会えなくなるんだぞ！」

「クソが！落ちろおおお！」

満身創痍。ふとあの時私を守ってくれた大和を思い出した。向こうにとっては助ける必要もない。だが、向こうは助けてくれた。

「大和さん……。」

心から願った。助けてと。誰でもいい。たとえ私が沈んだって良い。この子たちだけでも誰か……。

その時空が光った。

「え……？」

空を見ると「光る棒」を放つ艦載機が敵艦載機を落としていった。突然の攻撃で敵攻撃隊は混乱、その混乱に乗じて私たちの艦載機も攻撃。これにより敵艦載機は全滅。そして同時に私たちが最初に接敵した敵艦隊も全滅、敵主力艦隊も壊滅状態になった。敵艦隊はたった数分で壊滅状態になった。

「大和……さんの仲間？」

私が出会った不明艦の唯一の特徴の「光る棒」を放つ艦載機。恐らく大和さんの仲間だろう。

その後も艦載機は上空警戒を続けていた。

「そろそろか？」

「そろそろですね。」

「第一次攻撃隊はどうだ？」

「∴∴ 勢いに乗ってそのまま敵性勢力を殲滅したようです。」

流石に第一次攻撃隊だけで殲滅するつて∴∴。第二次攻撃隊の面子が凄いがつくりし

てるんだが。まあそうだよな。飛べると思ったら飛べないだもん。分かったから取り敢えず涙拭けよ。

「あとどれくらいで接触する？」

「だいたい十分くらいですかね。」

「じゃあ第一次攻撃隊に伝えてくれ。『こちらの方まで艦隊を誘導せよ』って。」

「了解しました。」

早速お世話になりますか。何日もレトルトしか食べれないのは精神的にキツイ。

## 転生軍艦、面会する

大体9分位経つと遠方からいくつかの影が見えてくる。

「間もなく艦隊と合流します。」

「分かった、そろそろ発光信号の準備を頼む。」

「そうやって発光信号を送ろうとした時だった。」

「… 艦長、無線が届いています。座標から恐らく艦娘からだと思われます。」

「なに？ 艦娘は無線ではなく発光信号でやり取りしているんじゃないのか？」

「分かりませんが応答しますか？」

「… そうだな、艦娘だとしたら応答しない理由もないからな。」

「ザザつという音と同時に無線が繋がり、向うのエンジン音が聞こえてくる。」

『… こちらは横須賀鎮守府所属第一艦隊旗艦の榛名です。そちらの所属を問います。』

「… こちらは漂流艦＜アライ＞だ。」

『どのような目的で我々と接触したのかを教えてくださいいただけますか。』

「… 私は艦娘… なのかどうかは分からないが、似た存在だ。同族が襲われていたら

助けるだろう？」

俺がそう聞くが向こうから帰ってくるのはザザっというノイズだけだった。

「… 副長、俺なんか不味いこと言った？（ほそほそ）」

「いえ、特に問題は無いように感じましたが…。（ほそほそ）」

副長と話していると無線に大きいノイズが走る。

『ザザッ… アライさん、私たちについてきてくださいますか？』

「… 何故だ？」

『我々の提督が会いたがっています。「話がしたい。」と。』

「… 了解した。そちらの艦隊の隷下に入ろう。」

どうやら向こうの提督さんが俺に興味を持ったらしい。

確か横須賀は女性の提督がいたからブラックではないはずだ。



く横須賀鎮守府く

「… もう間もなく艦隊が到着します。」

和服を着たメガネの女性が白い軍服『海軍服』を着た女性に報告する。

「… そう。」

軍服の女性はチラッと手元にある書類に目をやる。

そこには『不明艦捕獲作戦』と書かれている。

「… まさか向こう側から来るなんてね…。」

彼女はそう呟き席を立ちそのまま執務室を後にする。

不明艦と”話し合い”をするために。

（横須賀鎮守府近海）

しばらく航行していると赤煉瓦の建物『鎮守府』が見えてきた。

「今日からあそこが俺たちの家か。」

「艦長、そうとは限りませんからね。」

「わかっているよ、どうにかして大本営お偉いさんを黙らせないとね。」

恐らく大本営は俺の力を欲しがらう。どんな手を使ってでも。

それに対して自分たちの意思をはっきり示さなければならぬ。

中途半端な態度を取れば必ず横須賀のこれからお世話になるだろう人たちに害が及

ぶ。

「しかし、政治関係には巻き込まれたくはないんだけどなあ……。」

「艦長、諦めてください。艦長もそれぐらいのことは予想していたでしょう。」  
「そうだけどさあく。めんどいじゃくん。」

港に入り艦から降りると白い軍服を着た女性が待っていた。恐らくこの『提督』だろう。

「初めまして、私は日本海軍中佐の花村<sup>はなむら</sup>香代<sup>かよ</sup>よ。」

「私は艦長のアライだ。よろしく頼む。」

俺は花村さんと握手をするとそのまま会議室のような場所に連れていかれた。

「…さてと、ごめんね突然こんな所に連れてきて。」

「いや、問題ない…。ところでこの部屋に連れてきた目的はなんだ？」

「それはね…。”これ”を見てほしいから。」

そう言つて花村さんは『不明艦捕獲作戦』と書かれた書類を渡してきた。

「…この不明艦というのは？」

「あなたの艦隊のことよ。」

「艦隊……?」

「この鎮守府の近海に出現した『超巨大戦艦』をはじめ『大和型戦艦』『イージス艦』そして『空母』の4隻までが確認されているの。」

「どうやら俺が変形した軍艦全てが察知されているようだ。しかし、この四隻ともすべて俺がやったことだと知ったらどんな反応するんだろうな。」

「……友好的ならば大本営で管理、敵対的ならば大規模作戦を執行し何としてでも沈める必要がある……ね。これを俺に渡した事がバレたら軍法会議にかけられるなんて生易しいものじゃすまないんじゃないか?」

「あなたの怒りを買って本土が焼け野原になるよりはまだましよ。私はあなたを捕まえる気はさらさら無いということを知ってほしいから渡したの。」

「……話が変わるがお偉いさんには『艦娘は兵器』という考え方が蔓延しているのか?」  
俺がそう聞くと花村さんの纏うオーラが変化した気がした。

「……ええ、あの大本営は艦娘を道具だとしか思っていないの。私みたいな提督は過半数にも満たないの。」

「そうか、通りで『捕獲』とか『管理』とか『沈める』とか書いてあるわけか。」  
全く、まさかとは思っていたが……。

「全く反吐が出る。」

おっと、ついつい本音が出てしまった。まあそれよりもやる事があるな。

「なあ、一つ頼んでいいか。」

「… 何ですか。」

「大本営に『不明艦を捕獲した』と連絡を入れてくれ。」

「… 何故？」

「何故？ そりや同族が軽視されているなら一発かましてやらないとな。」

花村さん以後から聞いた話だと結構悪い顔していたらしい。

## 転生軍艦、準備をする。

大本営に連絡を入れたところ『明日そちらに人員を送る。逃がさぬように嚴重に管理したまえ。』というふうに戻ってきたらしい。

まあ逃げるも何も大本営グズ共を絞めるために俺は今ここにいるんだがな。

「なるほどな．．． ありがとう。だが明日となるとしばらく時間があるな．．．」

「ならこの案内をしようか？」

「：．． 俺はこの鎮守府にいるとは一言も言っていないんだが。」

「だって貴方数日前にここら辺に来てたでしょ？この偵察をしに来たんじゃないの？」

「どうやら漁船でここに来ていたことはバレていた様だ。一目には気を付けていたからカメラか何かに見られていたんだらう。」

「まさか映つてたとはな。まあそうだな、ここに着任することを認めてくれるなら俺は貴女の艦となろう。」

「そんな簡単に決めていいの？他にも貴方以外の艦と話を付けないと．．．」

「そう言えばまだいろいろ弄れることは言つて無かつたな。」

「それについては大丈夫だ。」

「なんで？」

「あの艦隊の艦はすべて俺だ。」

「は？」

まあそうか。普通はこんなこと言われても理解できないだろうな。

「俺の艦は兵装から船体の形状まですべて変えることが出来るんだ。」

「……つまり今まで出てきた不明艦は同一艦つてこと？」

「そういうことだ。理解が早くて助かる。」

「……うそ、信じられない。」

取り敢えずボケつとしていた提督の意識をはつきりさせ鎮守府の案内をしてもらった。

「先ずは執務室。基本的に私と秘書艦がここで執務をしているよ。」

執務室は内装はほとんどなく執務机と椅子、本棚程度しか置いてなかった。

「なら何か用事がある場合はここに行けばいいんだな？」

「そういう事。それじゃあ次行くね。」

「次は工廠。ここで入渠や建造、装備開発を行ってるの。」

中に入ると機械油の臭いが鼻を突く。中には様々な機械があつたが、どれがどれだか



俺にはわからなかった。

「なるほど……だが俺はここにはお世話になることはなさそうだな。」

「あはは……じゃあ次行こうか。」

「ここは艦娘寮だよ。艦娘たちはここで寝起きしているよ。」

艦娘寮は基本的にすべて同じ部屋の大ききらしい。廊下をぎつと見たただけだが、ゴミなどは一切見当たらない。

「清掃は行き届いているようだな。」

「そりや当たり前でしょ。」

とまあこんな感じで様々な場所を案内してもらって日が暮れる頃に食堂に案内してもらった。

「で、ここが食堂。ここで皆ご飯を食べるの。」

中は見た感じ古き良き食堂といった感じの場所だ。夕飯時だからか腹の虫を起こすようないい匂いが漂ってくる。

「ふむ… いい匂いだ。それに何故だか懐かしい。」

「この食堂は間宮さんと伊良湖ちゃんまで回してるの。二人とも料理の腕が良いから期待してもらって良いよ。」

「そうか、期待しておこう。」

俺が提督と食堂で少し話していると後ろから「あの…。」と声をかけられた。

「ん… 何か用か？」

「貴方はあの空母に乗っていた人ですよね？」

後ろから声をかけてきた女性は黒髪のロングヘアで和服を着ており、頭に金のカチューシャのようなものを付けている。

「ああ、そうだが。君は？」

「私は榛名と申します。」

戦艦榛名。偶然か運命かはわからないが俺が接触した二つの艦隊にいた艦だ。

「あの… 大和さんは… どうなっただんですか？」

「ああ… 大和か。あいつならまあ… 大丈夫だ。死んではいない。」

まだすべて俺が変形した艦だということはまだ提督しか知らない。

「そうですか… あの、出来れば大和さんにありがとうと伝えていただけると…。」

「分かった、伝えておこう。」

俺がそう言うのと榛名さんは「ありがとうございます！」と一礼した後には彼女と同じ服装の女性のもとに走っていった。

「… 伝えなくてよかったの？」

「どこから情報が洩れるかわからん。少なくとも大本営との話し合いの主導権をこちらが握るまでは明かすことはしない。」

「そう。」

取り敢えず俺は食券機で『焼サバ定食』を買った。

## 転生軍艦、見誤る

提督と一緒に席に座り焼サバ定食を食べ始める。一口食べると口の中に旨味が広がる。身はふつくらとしていて、程よく脂がのっついてジューシーだ。焼き加減も最高だ。

「……旨いな。」

「でしょ？ 間宮さんの料理は全部逸品なんだから。」

「……味噌汁も旨い。ご飯もモチモチしている。」

確かにこれならやる気も出るな。正直これが毎日食えるならここで働きたくなりそうだ。

俺がバクバクとご飯を食べていると突然放送で提督が呼ばれた。

「ちよつと行ってくるね。」

「そうか、じゃあ俺は艦の方に戻っておく。何か用事があつたらこれで連絡を寄こしてくれ。」

俺はそう言って通信機を渡す。提督はそれを受け取りと駆け足で食堂から出ていった。

俺も食べ終わったので食器を返却口に置き食堂を後にした。

艦に戻るために食堂を出て廊下を歩いた方がいいが先程から後ろに何か気配を感じる。結構距離が近いのでとても対応に困っている。大体1m後ろぐらいの距離である。

まあそれよりも副長と連絡を取って、いつでも兵装が変えられるように準備させるか。

「副長、聞こえるか。」

『はい、どうしました？』

「今からそちらに向かう。デバイスの準備をしておいてくれ。」

『了解しました。』

「後できれば俺が乗艦したら絶対に誰も入れないようにしてくれ。後は特に大丈夫だ。」

『そのように手配します。』

「頼んだ。」

通信を切り早歩きで艦へと向かう。後ろの気配はぴつたりと付いてきていた。

外を出る頃には気配は消えていたがいったい誰だったんだろうか。面倒ごとを起こしたくないので無視していたが正直気になる。

艦に乗り艦橋へ向かうと副長がタブレットの横で敬礼して待っていた。

「おかえりなさいませ艦長。指示通りにデバイスを準備しておきました。」

「ありがとう、じゃあ早速明日に備えて色々準備しますか。」

俺はタブレットを手に取り近くにあったイスに座る。

「艦長、準備とは何をなさるのですか？」

「ん？レーダーの強化だよ。ちよつと気になることがあつてね。」

「気になること……ですか。」

「明日腐れ外道どもが来るがここは反兵器派だ。一方あいつらは兵器派。何も無しで来るわけないだろう？」

「つまり……『海兵隊』か『艦娘』の襲撃がある可能性が？」

「無きにしも非ずってことだな。」

俺はそう言いながらタブレットでレーダーと人工衛星を連動させる。これによって人工衛星を使い艦船を識別することを可能にする。ハッキングしてだが。

「まあ取り敢えず沈めるつもりはない。」

「ならばどうするのです？沈めなければ向こうが沈めに来ますが。」

「なに、簡単な話だ。大本音頭を潰せば終わる。」

「……それでは日本が負けますが。」

「あ、そっかあ……。」

それは考えてなかったなあ。どうしようか…… まあ向こうが何か仕掛けて来たら何かし返せばいいだろ。

「とりま明日日が昇ったら戦闘機一機だけ準備しといて。」

「了解しました。」

## 転生軍艦、敵を作る

（大本営）

「これより緊急会議を始める。」

会議室に集まった数人の男たちが話し合いを始める。

「先ほど連絡が入ったが不明艦隊の一隻が横須賀鎮守府にて捕獲された。」

「それは本当か？」

「ああ、これで我々が戦争を終わらせることも…世界の頂点に立つこともできるだろ

うな。」

「しかし、向こうが素直に応じるだろうか…。」

「応じなくとも主導権は此方にあるだろう。向こうは単なる兵器だ。」

この様に捕獲した不明艦をどう『扱う』かをずっと話し、話がまとまった後にすぐに不明艦を引き取るための人員が派遣されることになった。

「それで誰を横須賀に送る？」

「それなら私の部下から二名送ります。」

そう手を上げ発言したのは『反兵器派』の提督だった。当然ながらその反応に対しほ



とんどの『兵器派』は良い反応をしない。しかし、

「そうだな、それじゃあ派遣する人員に関しては君に一任しよう。」

そういったのは元帥の地位に就く人物であった。

元帥の地位に就く者はほとんど『反兵器派』である。彼らにとって艦娘とは『女神』であり最後の頼みの綱である。それをないがしろにすることは到底できなかつた。

結果、反兵器派の人員が割かれることになった。

「横須賀鎮守府」

「いよいよ今日だね…。」

「そう緊張しなくても良いだろう。」

俺と提督は大本営からのお迎えを待っていた。大本営には正直言いイメージを抱いていないからできればすぐ帰ってほしい。

提督と執務室で待っているとノックと同時に長門の声がドア越しに聞こえてきた。

「提督、大本営の方をお連れした。」

「入って。」

ドアが開くとそこには白い軍服を着た男性が二人立っていた。

片方は無精ひげで少し太っており、もう片方はひよろ長く若い人物だった。

「初めまして、私は花村 香代といいます。こちらが不明艦のアライです。」

「ご丁寧にも、私は村木 哲三といいます。こっちのガリガリは山本 本剛とい

ます。」

「おい、村木。私はガリガリではない。細マッチョと呼べ。」

「俺に腕相撲で負けるやつがマッチョなわけないだろう？もつとお前は食え！」

自己紹介が始まったと思つたら今度は喧嘩が始まった。…もしかしてこの人たちあまり悪い人じゃない？

「おおつと失礼。つついいいじつてしまった。早速ですが、我々は不明艦を受け取りに来ました。」

「はい、そのことなんですけど…。」

提督が下に出てお願いしようとしてるが…正直提督にやつてもらふ必要がないのでちよつと下がってもらおうかな。

「提督、大丈夫だ。俺が自分で言う。」

「え、でも」

「これは俺の問題だ。提督を巻き込む必要がない。」

そう言つて俺は大本営から来た二人の前に立つ。

「すまないが俺は大本営に行く気はない。」

「…何故だ。」

「艦娘を『道具』として扱っている奴らの下に行くつもりはない。」

「…それをどこから聞いた。」

「情報媒体からインターネットに接続し、海軍のデータにハッキングして得た情報だ。」

「ハッキング？そんな報告は一切上がってないが。」

「当たり前だろう。うちの部下がそんなへまをするわけないからな。」

とまあこんな感じで真つ向から大本営に行くことを拒否して答えていたんだが、突然副長から通信が入る。

『艦長、少しよろしいでしょうか。』

「ん、ちよつと待つてくれ。提督、通信が入った。少し席を外す。」

「…分かった。すぐ帰つてきてよ。」

「ああ。」

流石に提督を大本営から来た人と一緒のところのところに置いておくのは可哀そうだが少し我慢していてくれ。

「それで、何かあつたか？」

『深海棲艦に動きが。四つの艦隊がこちらに向かつてきています。』

「ほおー…。まさかあつちが動くとはね。とりま規模教えてちょよ。」

『空母一隻、戦艦一隻、重巡洋艦一隻、軽巡洋艦一隻、駆逐艦二隻の組み合わせが三つです。』

「ん？副長が口ごもるとは珍しいな。最後の艦隊の編成は？」

『…空母三隻、軽巡洋艦一隻、駆逐艦二隻なんです、そのうちの空母一隻が姫級の可能性があります。』

「姫級か…。あんまりやったことがないからわからないがメツサ強い奴のはず…。おk、すぐそつち行く。」

俺は通信を切ると荒々しく扉を開ける。

「提督、こつちに深海棲艦の艦隊が接近中だ。」

「…ほんとう？」

「ああ、接近中の艦隊が四つ。そのうちの一つは姫級の可能性がある。」

「姫級だと！」

俺が提督に報告をしていると村木が驚きながら立ち上がる。

「だとしたらすぐに大本営に連絡を！」

「必要ない。」

「何故だ！」

「俺一人で対処できる。」

「お前ひとりで何ができる！」

「こいつうるせーな。ちよつと黙ってもらいたい。流石に俺の情報を知っているなら

あれぐらいどつてことないんだが…。

「分かった。援軍要請に関しては自由にしてくれ。俺は勝手に始める。」

「そうやって俺は部屋を出る。まだそこまで接近してきてはいないとしてもすぐに準備を整えなければここに被害が及ぶかもしれないな。」

## 転生軍艦、初の姫戦

取り敢えず艦橋に戻ってきたわけだが、正直今の装備で空母六隻に勝てるわけがないで艦ごと変えよう。まさかここに来て二日目で秘密を明かすわけになるが。

「よし、出港しよう。」

「艦長、現在の装備で横須賀鎮守府に一切被害を出さずに戦闘を行うのは難しいかと。」  
「わあつてるわあつてる。船体デカくしたいから港から出るだけ。」

「なるほど、納得です。」

取り敢えず横須賀鎮守府が少し小さく見えるぐらい離れたのでそろそろ船体をいじることにする。

「副長、タブレットを。」

「はいどうぞ。それで、今度はどんな艦にするんですか?」

「航空機マシマシ対空マシマシ火力マシマシ雷撃マシマシ装甲マシマシな艦。」

「…もう何も言いません。というかそれぐらいの規模になると尋常じゃないくらい大きくなる気がするんですが。」

「主砲は側面にレールガンつけて終わり。対空も衝撃波起こす特殊弾に変えて終了。航

空機はすべてジェット機で。雷撃は：：側面に適当につけてフィニッシュ。装甲は文字通りマシマシ。だから大丈夫だ、問題ない。」  
「というわけで早速お披露目かな？」

主砲：300cmレールキャノン一基

副砲：20センチ3連装電磁砲8基

魚雷：通常弾頭魚雷 黒渦弾頭魚雷



対空兵器：12.7cm連装高角電磁砲8基16門、25mm3連装電磁機銃 37  
基

12cm28連装特殊誘導噴進砲12基

艦載機：F/A-18E/F 34機 AV-8B ハリアー II 36機

パロー×11 F/A-18E/F：M61A1 20mmバルカン砲×1・AIM-7 ス

4 AV-8B ハリアー II：GAU-12U イコライザー・AGM-8  
ハーブーン×8

機関部：量子機関P型二基

全長：337 m

幅：76.8 m

最大速力：およそ80 knot

装甲：一応50cm砲だったら貫通できるYO☆

「……艦長、えげつないです。」

「ああ、俺もいじつてて思った。反省も後悔もしていない。」

「別に後悔も反省もしなくていいです。」

「あつはい。」

ちなみに主砲である300cmレールキャノンは甲板に組み込んであります。

しっかし離れているとはいえ四艦隊だからなあ……。パパつとやっちゃいますか。

「副長、どの兵装が射程に収めてる？」

「ちよつと待つてください……。艦載機とレールキャノンが射程内です。」

「了解、それじゃあレールキャノンは姫級をやって艦載機は半分あげて。」

「半分ですか。」

「敵が潜水空母とか持ってたら怖いし……。」

「了解しました。レールキャノン発射準備を始めます。」

「ヴィインという重い音を上げながら甲板がせり上がり巨大な砲身が出現する。

「いやあやつぱりロマンはいいねえ……。」

「仰角調整…… エネルギー充填開始。」

砲身がゆつくりと空を見上げレールキャノンのキュイイイインという甲高い音が艦橋内に響く。

「…… エネルギー充填完了しました。」

「どうやら巨大な砲身に見とれていたらエネルギーの充填が終わったようだ。」

「砲弾は何でセットしてある?」

「通常弾がセットしてあります。」

「おけ、それじゃあレールキャノン、目標姫級、てえ!」

「発射!」

ドオオオオン!

流石300cmレールキャノンというべきだろうか。レールキャノンだというのに尋常じゃない衝撃が艦橋、いや恐らく船体全体を襲っているだろう。

「…… これほどの衝撃だとは。」

「艦長、艦載機を発進させます。」

「ん、ああ。念の為姫級のところにも少し送っといてくれ。」

「なぜですか？」

「勘：：だ。なんか嫌な予感がする。」

「はあ：：分かりました。」

甲板砲身をしまい艦載機を発艦させていく。

なんか嫌な予感するんだよなあ：：。

「… ナンデ私ガ。」

太平洋のあるところとある艦隊が横須賀鎮守府に向けて進撃していた。

「泊地棲鬼デモヨカッタハズナノニ…。」

その旗艦——イラストリアス級航空母艦——に似た航空母艦の艦橋にいた女性は愚痴を言いながら水平線を睨んでいる。

「ハア… 憂鬱ネ…。」

そう言いながらため息をついた時だった。突然爆音とともに艦が、女性の周りの空間が激しく振動する。

「アツ… ガア…。」

突然襲ってきた衝撃に対応できるわけもなく『装甲空母姫』は艦橋内で体中を打つ。

「ナ… 一体何ガ…。」

体中を駆け巡る激痛に耐えながら立ち上がり艦隊の状況を確認する。

すると彼女の目に飛び込んできたのは爆発炎上する味方艦の姿だった。

「ウソ：： ナンデ：： アリエナイ：：。」

装甲空母姫は現実を理解できずその場にへたり込む。そして、そこには槍を携えた空飛ぶ兵が近づいていた。

## 転生軍艦、攻撃が防がれる

「艦長、先ほど攻撃した姫級ですが無傷でした。」

「は？」

「映像を見直すと着弾した瞬間にバリアが張られていることを確認しました。」

「バリア？」

「我々の電磁障壁に似たようなものです。」

「へえー。」

驚いた。相手もバリアみたいなの持ってたとは。しかもあの砲撃を無傷とは…。

「副長、レールキャノンってどれくらいの間隔で撃てる？」

「二分以上は装填に時間がかかります。」

「おけ。」

レールキャノンをバカすか打つのは無理そうだな。じゃあ艦載機で波状攻撃？ タイマンじゃないとできなさそうだな。まあ取り敢えず後で考えるか。

「艦長、姫級の方に接近するよ。最大船速。」

「了解しました。最大船速。」



「あ、それと姫級以外の艦隊はどうなった？」

「確認します。： 撃沈した艦が多数ですが、一部大破どまりの艦がいます。」

流石に四艦隊を相手にするのは無理があつたかな？ 姫級もレールキャノンを耐えるとは思えなかつたし。まあ姫級以外戦闘続行が困難なら艦載機を割り当てれるな。

「それじゃあ全艦載機を上げるから第二次攻撃隊は発艦準備させて。」

「了解しました。それと追加報告ですが姫級に向かつた艦載機は弾切れ、姫級は中破どまりです。」

「やっぱりバリア？」

「はい、ミサイルの斉射をすべてバリアに守られたようです。」

「中破の要因は？」

「バリアといえど長時間張れるようなものではないようです。再度張るまでの時間に攻撃隊がミサイルを撃ち込むことに成功しました。」

普通の艦なら撃沈してるとような攻撃なんだが。： さすが姫級だわ、対艦ミサイルを食らつてもすぐには沈まないな。

「それじゃあ対艦ミサイルによる波状攻撃を、バリアがなくなつたら掃射させろ。」

「了解、全艦載機に通達します。」

姫級は何とか出来るだろう、それよりもこの後どうしようかな。：。

装甲空母姫は信じられなかった。自分の部下が突然爆音とともに沈んだ。

そして現実だと分かればわかるほど胸に怒りが込み上げてきた。  
「ユルサナイ……」

彼女とともに戦場を生き抜いてきた仲間が目の前で散る。彼女を奮い立たせるのはそれだけでも十分だった。

「ユルサナイ……！」

装甲空母姫はすぐに仇を取るために艦載機を発艦させる。

すべての艦載機を発艦させた頃に『それ』は来た。爆音とともに現れた異様な形の飛行物体。

それは艦娘ではなく『人類』が扱っている兵器にとても良く似ていた。

「人間ゴトキガ……！」

しかし、その飛行物体に艦載機は次々と落とされていく。そして彼女に向かって『槍』を放つ。

それは『障壁』によって阻止される。

装甲空母姫はただただ対空砲火を行った。障壁のおかげで少しの間なら耐えることができる。

その間に少しでも落とすために撃ち続けた。

「墜ちろ…… 墜ちろッ……！」

しかし、近づいてくる機体は半数ほど落とした直後に障壁が消滅する。

そして槍が船体に直撃する。

「グワッ!？」

船体が大きく揺れるが被害は軽微なので問題なかったが甲板を集中的に狙われたため艦載機をすぐに発艦させる事が不可能となった。

しかし、それ以降攻撃はなかった。飛行物体の方を見ると、どんどん離れていくのが見えた。

しかし、装甲空母姫は慢心はしてなかった。”次は確実に沈められる”ことが分かった。

それでも退かなかった。散った仲間のために、彼女は飛行物体が消えた空を睨んでいた。

## 転生軍艦、とどめを刺す。

「……来々。」

睨んでいた空から点が見えてくる。さつきよりも多い数が飛んでいる。

あの飛行物体には対空砲は意味が無い。

しかし、今更退いたところで仲間とともにするのは変わらない。

なら少しでも抵抗してやろうと思ったのだ。

「……来イ！」

最初の攻撃はすべて障壁で防ぐことができる。

しかし、さつきと同じように一定時間が過ぎると障壁が消滅する。その時だった。

艦内に爆音が反響する。それは外からの攻撃ではなかった。

中からの爆発——つまり誘爆——が発生したことが装甲空母姫は瞬時に理解した。

「……コレマデネ。今行クワ……ミンナ……。」

次の瞬間艦載機に付けていた魚雷や航空爆弾に誘爆し艦全体が爆発する。

艦はそのまま沈んでいく。仲間が沈む海に。仲間と共に。

「艦長、姫級の撃沈を確認しました。」

「ん、それじゃあ帰投しますか。」

「了解。175。回頭。最大船速。」

あつけなかったがレールキャノンを無傷で耐えたときは正直言ってビビったね。あれを耐えられるとは思わなかったからな。レールキャノンを食らえば流石にこの船でも軽く沈むだろう威力なんだが。

「副長、この後どういうふうになっていくと思う？」

「どう…とは？」

「大本営がどう動くか。」

「おそらくですが意地でも取り込もうとすると思われます。」

「脅しても？」

「脅した場合は少しはおとなしくなりますが機会があれば積極的に勧誘すると考えられます。」

そっか。それじゃあ結局大本営が動くか。出来れば大本営とは関係なく過ごしたかったんだけどなあ…。まあ無理か。

「ああ…。めんどい。大本営が定期的に勧誘に来るとかめんどくせえ…。やっぱ大本营爆破した方がいいんじゃない？」グデー

「さつきも言いましたが、それだと軍の頭を潰すことになりますよ。」

「わあつてるわあつてる。言ってみただけだ。あくめんど。」

俺がただただ「大本営めんどい」と愚痴をこぼしていると副長が口を開く。

「艦長、なら敢えて大本營の勧誘に乗りましょう。」

「え、どつたの急に。頭逝かれたか?」

「いえ、逝かれてなどありませんよ。むしろ絶好調です。」

と（小さい）胸を張ってどや顔をしている。小さいのでそのどや顔も可愛らしいものとなっているが。

「俺は大本營にこの力を貸すつもりはないぞ。めんどくさい…。」

「別にこの艦を使わなくてもよいのです。」

「は?」

俺が何言っただかこいつという目を向けるが副長は気にせずに続ける。

「艦長が『提督』として鎮守府に着任してしまえばいいのです。」

「… ああ… ああ…。」

その後大海原に一つの叫び声がこだました。



（横須賀鎮守府 会議室）

俺たちはあの後鎮守府に戻って姫級を撃破したことを報告。当然提督と大本営から来た人は信じなかったが、後で到着した付近の鎮守府の連合艦隊が残骸を確認してやつと信じた。

そして先ほどの続きを行うために会議室にいた。

「で、もう一度聞いてもいいかな？」

大本営から来た小太り髭男の村木がゲンドウポーズをしながら聞いてくる。こつち

の世界にそんな名前があるかどうかはわからんが。というかどっちかという也太つてんだから少佐だろお前。クリーク！クリーク！

「何をです？」

「本当に大本営に来ないのかね？」

「別にいいが二つ条件がある。」

俺がそう言うのと提督と大本営の人が驚いた顔をする。

「……条件は？」

「二つ目は俺を提督としてこの近辺の鎮守府に着任させること。二つ目は俺のやることに文句を言わないことだ。」

「……それは我々では決定できない。大本営に連絡を入れる。」

まあそうだよな。大本営から来た人といつてもそこまで上の人ではないだろう。連絡するならついでに大本営に一言言っとくか。

「ついでに大本営のお偉いさんに一言伝言頼んでいいか？」

「……何だ。」

「主導権はそちらにあると思うな。」

## 転生軍艦、職に就く

↳ 大本営

「これより緊急会議を始める。」

大本営で再び緊急会議が行われる。しかし、集まっている男たちの顔は前回よりも険しいものになっていた。

「事前に伝えてあると思うが不明艦は我々のもとに付くことに条件付きで同意した。」

「その条件は連絡されていないのだが？」

「それがこの緊急会議の議題だ。不明艦は提督として横須賀に近い鎮守府に着任すること。そこで行う行為を一切黙認すること。この二つを条件として提示してきた。そうでなければ応じないと。」

「そんな条件飲めるわけがないだろう。」

「兵器如きに譲歩する必要はない。」

「しかし、不明艦はそうでなければ応じないと言っているのだろうか？」

「あの戦力が亜米利加に渡ってしまったら損するのは我々だ！」

という感じで会議が紛糾した。一方は応じる必要がないと言い、もう一方は応じなけ

れば有力な戦力が亜米利加に渡ってしまふことを危惧し応じる必要があると言う。

「どちらも一歩も引きさがらずに会議がしばらく続いた時だった。

「落ち着かんかつ！」

会議室に一つの怒声が響き渡った。その怒声は会議室内で言い合っていた者たちの動きを止めるのに十分だった。

そして怒声を放った『元帥』は重々しく口を開けた。

「……実は我々元帥の地位の者だけに不明艦と横須賀鎮守府提督から連絡が入っている。」

「……それは、どんな内容なんでしょうか。」

「横須賀鎮守府からは『彼は我々を<sup>人類</sup>守るために生まれたのではなく艦娘を守るために生まれた。』という旨の言葉だ。」

その元帥の言葉にざわつきが広がる。「どういうことだ?」「兵器を守るために?」

「我々は対象ではないのか?」という疑問の声がところどころから発せられる。

「……なぜ横須賀鎮守府提督はそのような結論に至ったのでしょうか?」

「横須賀鎮守府からの報告だと不明艦は艦娘を擁護する言動が見受けられるらしい。それに對し艦娘を蔑ろにする者に対しては攻撃的な言動が見受けられるらしい。それで我々、大本営も目の敵の様に思っているらしい。」

「そんなことが……。しかし、それは横須賀鎮守府提督が？の報告を行ったとは考えられませんかでしょうか。」

「……私も最初はそう思ったよ。しかし、私の部下から来た連絡では不明艦は元帥の地位の者だけに『主導権はそちらにあると思うな』という伝言が届けられた。」

元帥の言葉でさらにざわつきが大きくなる。その中、元帥が口を開ける。

「私は……。この条件を飲むことに賛同する。」

「元帥！正気ですか！」

「貴様！少将のくせに元帥に齒向かうか！」

大本営は緊急会議の結果条件を飲むことに決定。元帥達は心配していた条件拒否にならず、胸をなでおろしていた。

〔横須賀鎮守府 会議室〕

「大本営からの連絡だ。」

連絡してから数時間後に山本から連絡があつたと報告される。

何でもかなり紛糾したが元帥たちの鶴の一声によつて終わつたらしい。

「大本営としては条件を飲むことに決定した。」

「分かった。それで、俺はいつ着任するんだ？」

「明後日だ。」

んん？ちよつとよく聞こえなかった気がするが明後日といったのかな？早くない？出るの早くない？

「… 決まるのが早いな。」

「ここら辺に戦果を全く出していない鎮守府があつてな。その提督を今日中に追い出して明日中に準備を整えて明後日の朝に到着できるようにここを出る、というスケジュールだ。」

「… 分かった。それじゃあ俺は艦に戻る。」

俺はそう言って会議室から出ようとした時だった。

「待てよアライ。せっかくだから一杯やらないか？」

そう言って少佐（村木）は杯をくいと飲む動作をする。

酒は正直飲んだことがないから興味があるな。この体がどれくらい耐えられるかも気になるし。

「… そうだな、一杯やろうか。」

俺はそう言って提督に酒のある場所を聞くと鳳翔さんのお店が良いらしい。

流石鳳翔さん。二次創作でもよく営んでたけどこつちでもやってるのね。





「でさくうちの上司はよおく。」

「その話はもう四回目だぞ。お前の連れは酒飲んで倒れてるし。」

「仕方えよおくだあつてこいつ全く食わねえんだもんよおく。」

居酒屋『鳳翔』に来てから一時間程経った。大本営から来た奴は酒を浴びるように飲んで細かい方は倒れてクリーク好きの某少佐は同じ話をさつきから何回かしている。

「ちなみに今はまだ昼時である。こんな昼から軍人が酒におぼれていていいのだろうか……。」

「おっさん、俺は少し散歩してくるよ。」

俺がそう言つて立ち上がろうとすると酔つたおっさんは全く力が入つてない手で俺の袴の振りを掴む。

「ああ〜連れねえなあ〜もう少し飲んでこうぜえ〜」

「それ何回目だよ。取り敢えず俺はもう行くよ。」

俺は愚図る酔っぱらいを無視して立ち上がる。…ん？よく考えたら金を一切持つてねえや。

「鳳翔さん、代金はこちらのお二人さんに頼むよ。」

俺はそう言つて居酒屋『鳳翔』から出る。

「取り敢えずこの後やることもないしそこから辺をぶらぶらするか。」

## 転生軍艦、質疑応答

居酒屋『鳳翔』から出てしばらく歩いたが特に何も起こっていない。どうやら他の子達は出撃やら遠征やら演習やらで忙しいらしい。

「ふう…… ころも何もないと暇だなあ…… かと行ってあの飲んだくれのところに戻るのもなあ……」

俺がそう愚痴りながら歩いていると後ろから呼び止められる。

「ねえ、あなたがアライ？」

「ん？ ああ、俺がアライだが…… 何か用か？」

振り返り声の主を確かめると、それはスク水の上にセーラー服を着た赤い髪の女の子だった。

スク水ということとは…… 恐らく潜水艦だろう。潜水艦はオリヨクルのイメージしかないが今日は非番なのだろうか。

「私は伊168よ。イムヤって呼んでくれていいわ。それで、あなたに一つ質問があるの。」

「質問？ 俺の答えられる範囲なら何でも答えよう。」

「一応俺の分からない単語とかが出てきたらまずいので副長と通信回線を開いておく。

「あなた：： いったい何者なの？」

「：： それは：： どういう意味だ？」

「あなたが敵艦隊を壊滅させたときに私は偶然近くにいたの。その時あなたがいたから興味本位で見っていたのだけど：：。」

副長、対姫級戦の時に潜水艦つて近くにいた？俺ucciそんな報告聞いてないんですけどお。

『ええ、通常魚雷しか撃てないような潜水艦は脅威ではありませんからね。』

それ以外が撃てたらそれこそおかしいと思うんですが。

「：： あなたが私達の常識の範囲外の攻撃をしていたのを見たの。それに：： あなたの船体が変わるのを見たの。」

「：： そうか：： あれを見られていたか：：。」

『艦長、カツコつけてないで質問に答えたらどうですか？』

突然辛辣な言葉を放たないでくれ。俺の心にダイレクトダメージが入るから。痛いから。

「そうだな：： 私は漂流艦なのは間違いない。だが：： この近海で目が覚めた時以前の記憶がなくてな。何も覚えていないんだ」

「そう… わかったわ。ありがとうね。」

そうやってイムヤは手を振りながら向こうへ歩いて行った。

「… 副長、俺の目が覚める前の記録ってある?」

『少々お待ちください…。 ありました、該当件数は36件です。』

うえ、そんなにあるのか。俺が目覚める前一体何があったんだろうな。

「その記録って何かわかる?」

『はい、船体データをまとめた物や聞いたことがない国の兵器一覧やレーザー兵器製作のイロハ…というタイトルの記録などです。』

「ん… それって全部同じ国?」

『いえ、すべて違う国の物です。しかもすべて違う世界のようなようです。』

「それってつまりすべて異世界の兵器ってこと?」

『はい、そうなります。』

「… ちなみにその中にベ○カ式国防術って言うもの入ってる?」

『少々お待ちください…。 該当件数は一件です。』

Oh… あつちの技術も入っちゃってるのね。道理でなんかオーバーテクノロジーがわんさかあるわけだ。

「… おっけ、了解、理解した。取り敢えずやることないから引き続きぶらぶらしとるか

「何かあったらよろぴくね。」

『了解しました。』

さあ・・・ ぶらぶらするといったが・・・ この後はいったいどうしようか・・・。

あの後提督と秘書艦と一緒にめっちゃ執務した。